

輪中村落の子どもの生活世界  
—遊びと親水性，岐阜県羽島郡川島村の場合—

穂 坂 明 徳

**Children's Life-world in the Waju Village**  
**—Play and Familiarity with Water, in the case of Kawashima Village,**  
**Hashima-gun, Gifu Prefecture**

**Akinori Hosaka**

**Abstract**

So-called waju is the area surrounded by bank, which is created for residential and agricultural purposes. This waju is typical in the western part of Nobi region. Most of the studies on waju were conducted from the viewpoint of flood control, flood prevention, etc. in the fields of geography, engineering, and history. And there was no study conducted on children living in waju.

This study aims at positive grasp and analysis of children's life-world which has been neglected in the past. Namely, the study;

- 1) surveys children's lifestyles and forms of their plays in waju village, and
- 2) examines how the environment specific to the village influenced their lifestyles and plays.

As a case study, Kawashima Village of Hashima-gun, Gifu Prefecture, was taken up. Senior citizens 65 years old and over who had been born and brought up there were studied by questionnaire and interview. And the following results were obtained;

- 1) separated vertical human relations between parents and children, and between adults and children,
- 2) organizational socialization of children through the annual events, and
- 3) "fighting" (aggressive) culture among peer groups.

Children's normative and group-oriented attitudes toward nature and their peers were developed through various plays. Familiarity with and the way of thinking toward "water" was nurtured in the life-world of children in the waju village through their life and plays.

**Key words**

waju, children's life-world, play, environmental education

## は じ め に

輪中は濃尾地方西部に形成され、広く分布・展開してきた居住・農耕地の囲堤形態である。木曾川、長良川、揖斐川のいわゆる木曾三川流域の湿地帯の地形及び気候的特質が、社会経済的にも独自性を有する「輪中」村落形成の自然的基礎を与えたといえよう<sup>1</sup>。

戦後の日本経済の発展とともに、河川改修、土地改良などの近代的な工法技術の進歩に支えられた治水事業の進展は、洪水の予防的対応を向上させ、水害の減少をもたらした。その帰結は、地理的歴史的な所産でもあった輪中形態を変容させた。それとともに、高度経済成長の過程で地域の社会開発が急速に進行し、都市化、工業化が輪中地域の生活構造や生活様式を変容させた。水屋、堀田に代表された輪中の景観的な特質は消失し、もはや今日輪中そのものが消滅ないし実態的な基礎を消失するにいたっている。

そうした水との闘いを刻み込まれた輪中の生活において、ともすれば見過ごされがちな「子どもの暮らし」はどのようなものであったのだろうか。とりわけ、子どもの自然体験や社会体験の希薄化が指摘される今日、輪中村落のもつ自然的社会的な制約は、大人とは異なる輪中の子どもの生活構造を規定し、家庭生活や遊び、地域での暮らしなどに大きな影響を及ぼしてきた。輪中意識の変容、消滅が問われるまでにいたった現在、かつての輪中村落の子どもの生活の中にその特質と原型を探る意義と緊急性があるのではないかと思われる。

### 1. 先行研究と本稿の課題

これまでの輪中研究は、昭和初年ころから地理学、歴史学などの幅広い分野にわたってなされてきた。輪中地域の形成過程を総合的体系的に研究してきた安藤萬壽男によれば、研究成果の主要な点は次の3つに整理される。「(1)輪中地域の地形的気候的諸分析を進め、輪中形成の自然的基礎をより明確にしたこと、(2)輪中の形成・展開・変遷を史的に究明したこと、(3)輪中地域の社会的経済的諸特性を明らかにしたこと」<sup>2</sup>であった。研究史的には別枝篤彦の「西濃平野に於ける輪中の地理学的研究」<sup>3</sup> (1932)をもって嚆矢とされる。さらに、1936年中沢弁次郎監修、秋山恒士により『輪中聚落地誌』<sup>4</sup>が刊行され、輪中集落が木曾三川に特有の形態である地理学的意義を述べている。また、松尾国松『濃尾に於ける輪中の史的研究』<sup>5</sup> (1939)は、輪中の形成を歴史的に跡付けながら、その土地に生活する「輪中民」の心理特質を明らかにした。戦後の研究においては、輪中地域の定量的、実証的な研究が安藤らにより共同研究として行われ、『輪中—その展開と構造—』<sup>6</sup> (1975)において地理、歴史にとどまらず経済、社会・民俗、工学などの観点から、輪中の総合的研究がなされた。さらにその後安藤は『輪中—その形成と推移—』<sup>7</sup> (1987)において、輪中地域全域の形成過程を体系的に明らかにした。「人間と水の争いという観点」から輪中研究に取り組んだ伊藤安男の『輪中』<sup>8</sup> (1979)は、土地制度・地主制度の発達と輪中間及び輪中内の水争い、対立的な住民心理を解明した。伊藤は「輪中の近代化」をも研究の視野に含ませて、近代化と輪中意識の変容を問う。一方、高度経済成長期に急速に変容が進む輪中地域の民俗学的な資料調査がなされ、「岐阜県輪中地区民俗資料報告書第1～第3」<sup>9</sup> (1968～1970)一連の収集記録が目される。

このように見てくると、「輪中」に関する研究史からは、人文地理学的、歴史学的また工学的などの広い分野にわたる諸研究に通底しているのは、治水や防水という観点からの研究である。輪

中民の生活様式や住民意識の民俗学的な調査研究においても、同様の観点を認めることができる<sup>10</sup>。

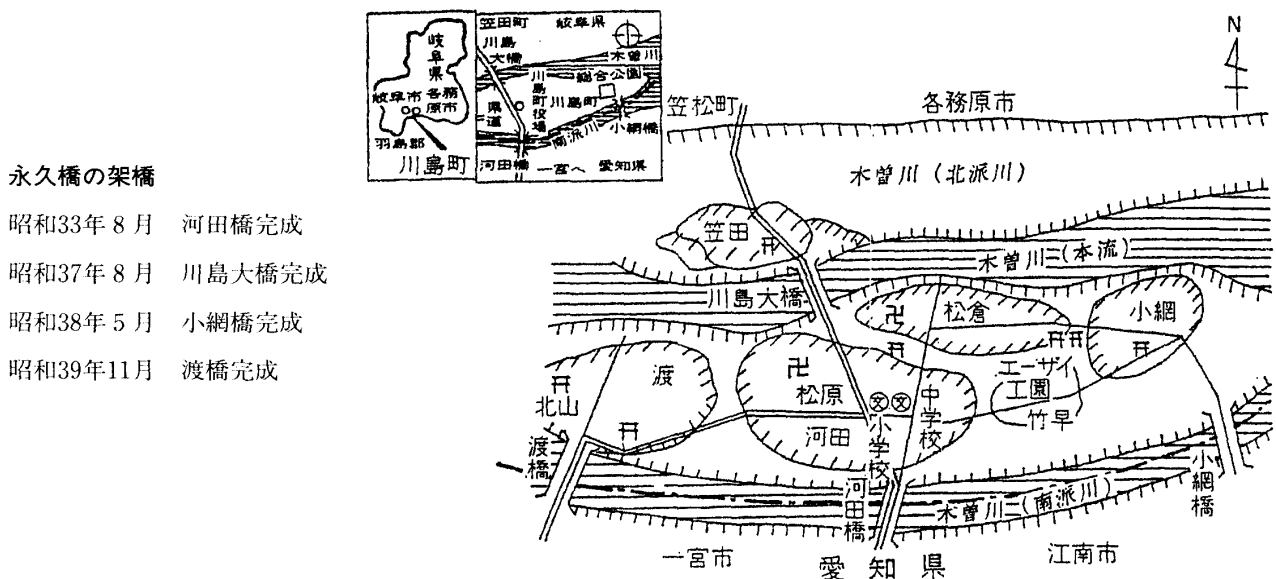
しかしながら、輪中生活を共有したのは大人だけではなかった。子どもも輪中という特異性をもった環境の中で、生活し成長をとげていく。その意味において、これまでの研究に「子どもの生活」という視点は、きわめて薄いあるいはほとんど自覚されていなかったといえよう<sup>11</sup>。子どもたちは輪中という所与の「水」環境の中で生育し、「水」という自然環境を相手に、遊びを含めて子どもの生活世界をつくってきたのである。おそらくこうした「水」環境の与えてきた作用は、大人とは異にした子どもの生活世界を形成し、影響をもたらしてきたと思われる。例えば、輪住民にとって水は水難をもたらす元凶である一方、時には肥沃な土壌とその実りをもたらす恵みの水でもあった。同様に、子どもの視点に立てば、水は自然とのふれあいを可能にする格好の遊び相手でもある。したがって、こうした子どもの生活世界に、輪中村落に根ざす特質とその独自性を探ることが重要な課題となる。そこで本稿の当面の課題は、輪中村落の一つを対象にして、当該地域で生まれ育った村民への質問紙調査及び聞き取り調査の結果をもとに、①子どもの暮らしと遊びの形態を明らかにし、②地域的特性である「水」環境が子ども期の生活と遊びのスタイルをいかに規定したかを分析することにある。

## 2. 調査対象地域の特性

まず、輪中地域の一般的な特性として川の比較的上流域に立地する場合と、下流域に立地する場合とで、水害の様相は異にする。洪水時においては、隣接する輪中同士でさえも高位部と低位部では水流や停滞水や排水をめぐる、相反する利害関係が生じる。歴史的に輪中水論とよばれてきた水をめぐる対立抗争は、輪中根性という独特の精神構造を形成する風土的な素地となってきた。これは必ずしも輪中間にとどまらず、同じ輪中内においても同様の利害関係が発生し、部落内対立を生み出す土壌でもある<sup>12</sup>。

さて、調査対象となったのは木曾川の比較的上流域に位置する岐阜県羽島郡川島村である。昭和31年に町制が施行されて、現在は川島町になった。岐阜県南端の濃尾平野の中で、羽島郡の南

川島町見取図（昭和56年4月当時）



東部を占めている。木曽川の形成する川中島となっており、南は木曽川南派川を隔てて愛知県一宮市、江南市と接し、北は木曽川北派川を隔てて各務原市、羽島郡笠松町と接している。(川島町見取り図、参照)

### (1) 川島村の地勢と輪中の特質

川島村は犬山市付近を扇頂とする犬山扇状地の端に位置し、木曽川本流の中州にあって、大小二つの島に分かれている。東西は約6 km、南北は約2 kmの楕円形に近い形をしていて、全体に起伏の少ない平坦な地帯である。総面積802haのうち345ha(43%)が河川敷となっている。木曽川上流部の流路は歴史的に河川改修、治水等の工事によりかなりの変遷をみてきた<sup>13)</sup>。戦後においても、図1及び図2にみるように、村(町)内の地形と景観を変えている。川島村は「築捨堤」とよばれる独特の輪中堤で守られていた。これは洪水で床下や床上が浸水した時、村内の水が早く流れ出るように四囲を囲わないで、下流側に堤防を築かず開放した構造を持つものである。上流域に位置していたため、水流の勢いがあり短時間で増水に見まわれるが、減水も早く、こうした地勢的な特質に対応した築堤であった。そのため川島村においては、下流域の輪中のように長期にわたって村内が浸水、冠水することはあまりなかったようである。

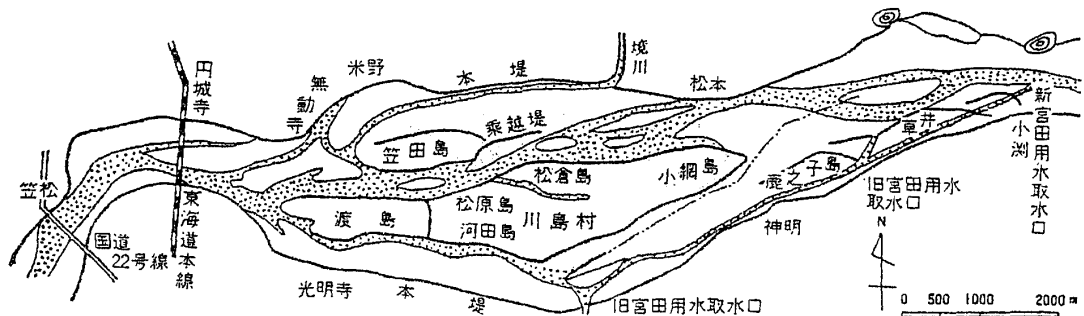


図1 木曽川上流部の流路(昭和24年)

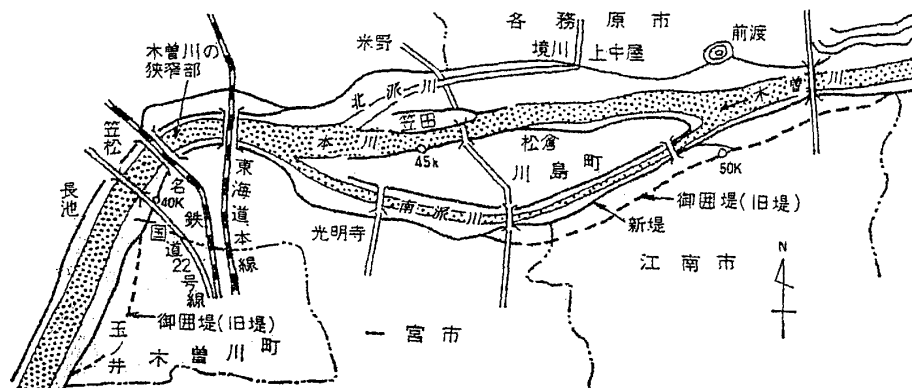


図2 木曽川上流部の流路(南派川開削後昭和50年ごろ)

### (2) 産業形態と人口動態の特徴

こうした地勢的な特質は、村の産業形態をも制約させてきた。すなわち、土壌は砂礫土であり、水田耕作には不適當であった。『川島町史』によれば、「川島町は、天正の木曽川大洪水以来、水に囲まれた中州になり、水をかぶること毎年、土地は荒れ土壌は砂質瘦薄、水田はわずかに7町

歩、畑は二一二町歩で、短作業では生計立て難き状態で、農民は兼業に迫られ、早くから養蚕業に従事して繭から糸を繰り、機を織ってきた。繭の産額は郡内で優れおり、絹織物業は塩瀬、羽二重等の各種の製品を多く産出し、また、撚糸業は技術の優秀と精良品で名をなし、その振興著しいものがあつた。」<sup>14</sup>と記されている。

このように兼業世帯が多く、しかも季節ごとに従業形態を変えて生活を維持してきた。例えば春季、秋季には養蚕業、夏季には漁業、川業そして冬季には河川改修工事などに従事するというように。表1は川島村の産業別戸数の推移をあらわしたものである。戦前より農業よりも撚糸・織物業の割合が高く、戦後においてもこうした産業構造の形態はそのまま維持されてきたことが明らかである。

表1 川島村の産業別戸数の推移

昭和18年度（戸数）	撚糸業285／織物業395／農業217／その他103
昭和23年度（人数）*	工業326（本業257，副業69）／農業737（本業451，副業286）／商業51（本業46，副業5）／水産業64（本業7，副業57）／その他193（本業167，副業26）
昭和33年度（戸数）	工業600／農業235／商業35／公務員及び自由業77／33

出所：川島村役場調（『川島町史 通史編』797～799頁より作成）

\*印は岐阜県統計書の数値

図3は昭和5年から平成7年までの人口の推移を5年間隔であらわしている。図には示されないが明治末から大正期、そして昭和戦前期にかけての人口の増減推移はほとんどなく平衡を保ってきた。戦後は疎開者の復帰などで、多少の人口の増減がみられ、また地場繊維産業の発展に伴う一時的な女子従業員の増加をみた。しかし、昭和40年を境に繊維産業の下降とともにそれも減少する。以上の分析から、川島村の住民構成は外部からの人口流入は稀で、村内内部の世襲的産業に基礎を置く在地的村民が圧倒的多数を占めてきたことが明瞭である。

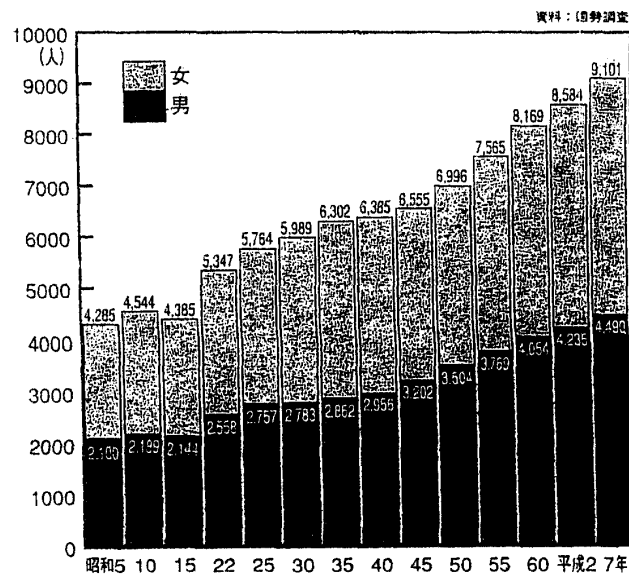


図3 人口の推移

資料出所）「生活専科」（1996，川島町制40周年記念誌）、  
川島町発行，17頁

### (3) 部落組織と風土特質

川島村の社会構造の基本単位となる部落組織は、「イトウ (一統)」ないし「クミ (組)」とよばれる同姓(族)集団によって構成された。それぞれが一族の氏神をまつる神社を有し、本家一分家関係を内包した互助組織の単位となっていた。すなわちこうした組織を基盤として同姓祭祀、葬儀、先祖法要などの共同体行事が機能した<sup>15</sup>。

また、表2のように部落の自治組織機構も同姓(族)集団が基礎単位として機能し、部落内対立を調整し、安定的な内部構造を維持させるように作用した。このことは、川島の風土が洪水という水難の頻発する厳しい自然条件に見合った、互助組織と互助意識を形成させてきたこと、それゆえに運命共同体としての連帯・団結の紐帯を強固に築く一方、排他的な村民気質を醸成してきたという輪中意識の形成を指摘できよう。

表2 川島村の部落組織と同姓(族)集団の構成

部落名	同姓(族) 集団
小網島	刈谷
松 倉	小島, 奥村, 尾関, 森, 木造, 豊田
河田島	三輪, 岩田, 尾関
松原島	鈴木, 水野, 野田, 脇田, 熊沢
渡 島	野田, 川瀬
北 山	青井
笠 田	脇田, 永田, 田中, 横山

### (4) 村内の学校教育の沿革

村内を川が何本も流れ、他村との往来や部落間の連絡にも舟が使われるといった一般的な運輸事情が常に存在した。とりわけ児童の通学には困難さをともないがちであり、そのこともあって小さな村でも分校を3校有していた。次に、川島村の学校設立の歴史的経過をみておきたい。

明治41年4月川島尋常高等小学校が松倉地区に設立された。分校として松河地区に博文分教場、渡地区に渡分教場、笠田地区に笠田分教場の3分校がそれぞれできた。その後、大正・昭和初期を通して川島村の学校教育は、地区ごとに分立して行われた<sup>16</sup>。昭和16年4月より国民学校令をうけて川島国民学校に改称された。そしてここにいたって初めて全村一円の統一校舎を設立することになった。博文分教場の全児童及び渡分教場の初等3、4年生が本校に編入された。とはいえ渡分教場の残りの学年と笠田分教場の初等科全児童はなお本校とは離れ、独自の教育を受ける状況であった。昭和22年4月新学制により川島小学校に改称されたが、本校一分校体制はなお存続された。昭和25年4月に渡分教場が閉鎖され、さらに昭和37年9月に笠田分教場も閉鎖されるにいたり、川島小学校の統合は完成をみるのである。これは永久橋として川島大橋が昭和37年8月に架橋され、本島中央と笠田地区との自由な交通が可能になったことによるものである。明治末川島尋常高等小学校が設立されて以来、実に半世紀以上も経過した後に、一元的な教育が開始されたことになる。この間大人社会における部落対抗意識は、子どもの世界では本校対分校、分教場間の対立意識に置き換えられ、遊びや仲間集団の行動にも反映されてきたのである。輪中社会が内包した子どもの世界の心的特性の1つの形成要因といえよう。

### 3. 調査の方法と回答分析

川島村は町制施行以後も、町内の社会変化は人口の流動性もあまりみられず、緩慢に進んだようにみられる。しかしながら、昭和33年8月河田橋が従来の木造から鉄橋へと永久橋が竣工され、その後川島大橋（昭和37年）、小網橋（昭和38年）、渡橋（昭和39年）とあいついで鉄橋が架橋された。このことは渡し舟を主要な交通手段としてきた輪中の孤島状態から外部社会へ通じる幹線道路の整備が完成したことを意味する。それにともない町内の主要道路が連結し、生活道路が拡充整備され、道路網が一変した。さらに昭和38年に大手製薬メーカーの工場が町に誘致されるにいたり、川島町の社会変化は急速に進捗した。新住者の増加の一方、輪中村落を支えてきた町民の世代交代が確実に進み、高齢化とともに家族の転勤にともなう離町者もあらわれてきている。

こうした社会変容が急速に進む現在、輪中村落の子どもの生活や遊びの実態を明らかにしておくことは、きわめて喫緊な課題であることを改めて指摘しておきたい。そこでまず、川島村の子どもの生活の全体的な輪郭を把握するために、質問紙調査を実施した。調査対象者は、川島村で生まれ、子ども期を村で体験している事が前提とされるために、きわめて限定された範囲にならざるをえなかった。しかしその分、サンプルとしての質的代表性は高いものと判断できる。

#### (1) 調査手続きと調査対象者のサンプル属性

調査は2001（平成13）年7月18日に65歳以上の町民に実施し、男性17名、女性43名、合計60名の回答を得た<sup>17</sup>。このうち上記の川島村出身者という条件のもと、男性15名、女性9名を有効回答とした。さらにその後の聞き取り調査の対象者にも回答を依頼し、最終的には男性20名、女性14名、合計34名を分析対象とした。サンプル属性として、表3に年齢・性別及び出身部落の内訳を示した。また、表4に父親の職業をたずねた結果をまとめた。ただし、職業については川島村の地域特性として兼業・副業をもつ世帯が多い条件を考え、複数回答の延べ数をあらわしている。

年齢層からみると、輪中村落としての社会構造や生活形態をいまだ色濃く有した昭和戦前期に子ども時代をすごした者が半数以上を占めている。また、多少の多寡はみられるが、各部落出身者をサンプル構成としている。父親の職業に関しては、農業を営む家庭は18名と約半数程度にすぎず、農業中心というよりも家内製繊維工業、川業（石舟、筏業、漁師など）が主体であった川島村の職業構造がうかがえる。

表3 サンプルの属性

(1) 年齢・性別

(人・%)

年齢	全体	%	男	女
80歳～	10	29.4	8	2
75歳～	8	23.5	3	5
70歳～	6	17.6	2	4
65歳～	8	23.5	5	3
NA	2	6.0	2	0
合計	34	100.0	20	14

(2) 出生地

部落名	全体	%	男	女
小網	7	20.6	4	3
松倉	2	5.9	1	1
河田	7	20.6	5	2
松原	5	14.7	1	4
渡	9	26.5	6	3
笠田	4	11.7	3	1
合計	34	100.0	20	14

表4 父親の職業（含 兼業）

（人）

職業名	全体	%	男	女
農 業	18	52.9	9	9
撚糸業	15	44.1	7	8
養蚕業	13	38.2	9	4
船 業	6	17.6	6	0
商 業	3	0.9	1	2
漁 業	1	0.1	1	0
その他	3	0.9	2	1
NA	4	1.2	3	1

## (2) 回答分析

## 1) 子ども時代の評価

さて、自分の子ども時代をどうしているかをたずねた結果が表5である。全体的には、「手伝い仕事に一生懸命であった」と感じている回答者が合計19名（55.9%）で、男女を問わずもっとも多く、ついで「のんびり楽しめた」が16名（47.1%）であった。また、「川の自然の厳しさを教えられた」と思っている者は、男性9名、女性6名、合計15名（44.1%）とこれも比較的多かった。しかも、そう思わないと否定する回答者は皆無であるところを見ると、子どもの頃の体験が一樣に強くしみついて、現在に及んでいるといえよう。男女で評価の多さが多少分かれたのは、「自然の遊びに恵まれていた」という点で、男性は「そう思う」と答えたものが11名でもっとも多かったが、女性では4名とそれほど多いとはいえなかった。これは子どもの頃の男女の遊び形態の差異が影響しているのではないかと思われる。

ところで昭和戦前期においては、子守りやお使い、家の手伝いなどは一般に子どもに課せられた労働であり、川島村の子に限ったことではなかった<sup>18</sup>。むしろ注目すべきは、自然の遊びとともに自然の厳しさや、水防を通じた人々の協力の大切さを川島村の子が強く焼き付けた点ではないだろうか。

表5 自己の子供時代の評価

（人）

	そう思う	全体	%	男				女			
				そう思う	どちらとも いえない	そう思わ ない	NA	そう思う	どちらとも いえない	そう思わ ない	NA
のんびり楽しめた	16	47.1		10	0	3	7	6	0	2	6
手伝い仕事に懸命	19	55.9		11	0	1	8	8	1	0	5
勉強・手習に精出した	8	23.5		4	5	4	7	4	2	0	8
自然の遊びに恵まれた	15	44.1		11	0	1	8	4	2	2	6
水防で落部の協力が大切	11	32.4		8	3	1	8	3	0	1	10
川の自然の厳しさを知る	15	44.1		9	3	0	8	6	0	0	8



## 2) 村行事の体験状況

では当時の子どもの世界で、伝統的な行事・慣行はどの程度経験されていたのであろうか。表6にかかげた行事の中には、今日もはや消滅しているものもあり、民俗学的に検証することは困難なものが多い。「川祭り」については、渡部落の子どもの受け継がれてきた伝統行事であり、そのため他部落の子どもの経験する機会はなかった。

まず回答者の半数以上に経験されていたものは、「水神まつり」(18名, 52.9%), 「手間代わり」<sup>19</sup>(17名, 50.0%)とよばれた行事・慣行である。ついで「うどんの日」<sup>20</sup>(16名, 47.1%), 「山の講まつり」<sup>21</sup>(15名, 44.1%)もかなり多く経験されている。「水神まつり」「山の講まつり」は、大水の災害除けと養蚕にかかわる山の神のお祭りであり、そもそもは大人の行事であったものが子どものレクリエーション的な慣行行事として、各地区で行われていたようである。輪中村に特有の「大水と畳上げ」に関しては、同じ村内でも部落の立地状況により、洪水時の出水や家屋の浸水程度に大きな開きが生じ、地域的な偏りがみられるために、回答者の体験数も意外に多くない。

こうしてみると、全体に村落共同体の行事・慣行は子どもの遊びや生活の一部に確実に浸透していたとみることができよう。

表6 伝統行事の体験

(人)

	やった		男					女				
	全体	%	やった	見た	聞いた	知らない	NA	やった	見た	聞いた	知らない	NA
手間代わり	17	50.0	11	1	0	1	7	6	1	1	1	5
水神まつり	18	52.9	11	2	0	0	7	7	2	0	1	4
山の講まつり	15	44.1	8	1	3	1	7	7	1	1	0	5
お精霊様	10	29.4	6	6	0	2	6	4	0	0	2	8
うどんの日	16	47.1	6	0	1	5	8	10	0	0	1	3
大水と畳あげ	8	23.5	5	1	1	6	7	3	1	0	2	8
川祭り	7	20.6	4	3	0	5	8	3	7	1	0	5
井戸ざらい	5	14.7	3	4	2	4	7	2	1	2	2	7

## 3) 放課後の過ごし方と遊び相手

そこでつぎに、子どもの遊びについて探ってみたい。放課後どのように過ごすことが多かったのかをきいた結果が、表7である。男女ともに、「外遊び」(28名, 82.4%)と「家の手伝い」(24名, 70.6%)が断然圧倒している。すなわち、当時における学校の外での子どもの行動形態は、家の手伝いをするか、それがなければ外で遊ぶという二つに一つの行動原理に支配されていたことが改めて確認できる。ではどんな相手と遊んだのであろうか、遊び仲間について表8をみると、これまた同級生が28名(82.4%)で大多数を占めている。また、同学年、気の合う子、幼友達なども過半数を越えた回答数がみられ、このことから遊び仲間は同級生だけに限定されず異学年、異年齢の集団で形成されることも多かったことがしれよう。ただし、よその部落の子や学校を超えて交流することはまず考えられないことであったようである。

表7 放課後の過ごし方

(人)

	よくやった	男			女		
	全体 %	よくやった	やらなかった	NA	よくやった	やらなかった	NA
外遊び	28 82.4	16	0	4	12	1	1
家の中	5 14.7	4	10	6	1	8	5
勉強	9 26.5	4	9	7	5	2	7
手習・稽古	6 17.6	2	9	9	4	6	4
家の手伝い	24 70.6	14	0	6	10	1	3
稼ぎの仕事	9 26.5	8	3	9	1	3	10

表8 遊び仲間

(人)

	遊んだ	男			女		
	全体 %	遊んだ	遊ばない	NA	遊んだ	遊ばない	NA
同じ組の子	28 82.4	14	0	6	11	2	1
同じ学年の子	19 55.9	11	1	8	8	2	4
気の合う子	19 55.9	9	3	8	10	1	3
幼友達	18 52.9	9	4	7	9	1	4
部落内(同組)	14 41.2	7	5	8	7	2	5
他部落(分校)	3 8.8	2	10	8	1	8	5

#### 4) 遊び場と遊び場の種類

表9は、17の遊び場の中からよく遊んだ場所を3ヶ所選んでもらった数を、男女それぞれ多い順に並べたものである。やはり川島村では「川」「川原」が子どもの遊び場として、中心的な役割を果たしてきたようである。そこで水場の遊びや体験をたずねることにより、具体的な遊びの世界を探った。表10は、子どもが「水」と接触する体験的な遊びや手伝いなどについての経験についてたずねた結果である。多い順に見ていくと、「泳ぎ・もぐり」(26名, 76.5%), 「魚捕り」(25名, 73.5%), 「こわし拾い」(24名, 70.6%), 「ツボ・ドウビン採り」(22名, 64.7%)となる。ここで「こわし拾い」について説明をしておくと、大雨の後などに上流の山岳地帯から流れ出てくる枯れ木や木っ端など(「こわし」とよんだ)を川原で拾い集める仕事である。川島には山がなく、山林もないので燃料となる薪は貴重な生活必需品であった。したがって大雨や洪水があると、村民は一家総出で早朝から堤防や川原で、競い合ってこわし拾いを行ったのである。また、ツボ・ドウビンとは、この地方ではたにしやしじみ貝のようなものをそのようによんでいた。男子が魚捕りをやれば、女子はツボ・ドウビン採りを主にやったという。このように水場での遊びにも、もちろん男子と女子で形態を異にするものもあるが、川遊びそのものは川島村の子どもにとってきわめて一般的なものであった。

一方、男子に特にみられた遊びに「舟遊び」と「石合戦」がある。舟遊びは、各戸で運搬手段として使われ老朽化した舟を子どもたちが借り出し、食料を持ち込んで遊んだり、また舟を何艘もつないで船底をもぐったりした遊びのようである。また、石合戦は文字通り川原で相対する相手との石の投げ合いである。

このように見てくると、水場での遊びは子どもが集団を形成しなければ遊べない性質のものが多く、しかも「水」という自然と一体化せざるを得ない特質をもっていたといえよう。

表9 よく遊んだ場所

(複数回答)

	男	女
1位	川 12	川 11
2位	川原 9	川原 7
3位	神社 6	家内 7
4位	原っぱ 6	神社 5
5位	校庭 5	庭先 4

## 遊び場の選択肢

自分や友達の家／家の庭先／学校／神社や寺(境内)／公園／広場／  
空き地／川／池／林／原っぱ／川原／土手／田畑／道路(通り)／  
橋／渡船場／その他

表10 水場の遊びや手伝いの体験

(人)

	よくやった		男			女		
	全体	%	よくやった	やらなかった	NA	よくやった	やらなかった	NA
魚捕り	25	73.5	18	1	1	7	3	4
釣り	19	55.9	15	3	2	4	4	6
ツボ・ドウビン採り	22	64.7	13	3	4	9	3	2
泳ぎ・もぐり	26	76.5	14	2	4	12	0	2
こわし拾い	24	70.6	12	5	3	12	1	1
遠泳	14	41.2	12	4	4	2	3	9
井戸水運び	17	50.0	10	7	3	7	2	5
舟遊び	13	38.2	12	4	4	1	4	9
石合戦	8	23.5	8	6	6	0	4	10
玉石拾い	5	14.7	3	11	6	2	2	10
砂利こぎ	4	11.8	3	12	5	1	2	11

## 5) 現在の自然環境

終りに、こうした川島村の自然環境の中で子ども期をすごした回答者に、現在の町の自然状況と比較評価してもらった結果が表11である。「自然の環境」一般についての評価は、肯定・否定でちょうど二分されたが、「川の水」の汚れ具合、「川とのふれあい」の減少、「子どもの遊び場」の減少などに関しては明確な差が出ており、いずれも「水」環境の悪化と結びつく結果の評価である。

表11 子どもの頃と比較した現在の町の自然

(人)

	全体 %	男				女			
川の水	きれいだ	きれいだ	変わらない	汚い	NA	きれいだ	変わらない	汚い	NA
	5 14.7	1	5	14	0	4	1	9	2
自然の環境	よくなった	よくなった	変わらない悪	悪くなった	NA	よくなった	変わらない悪	悪くなった	NA
	14 41.2	8	2	9	1	6	0	4	4
川とのふれあい	多くなった	多くなった	変わらない	少なくなった	NA	多くなった	変わらない	少なくなった	NA
	2 0.6	2	0	15	3	0	1	9	4
子どもの遊び場	多くなった	多くなった	変わらない	少なくなった	NA	多くなった	変わらない	少なくなった	NA
	2 0.6	1	2	14	3	1	1	9	3

#### 4. 川島村の子どもの生活の特質

これまでは子ども期の生活と遊びのスタイルの輪郭を探ってきた。そしてそこには確かに輪中村落の宿命ともいえる、水に制約されまた水を媒介とする生活と遊びがみられ、子どもの生活世界を形成していたことがうかがわれた。そこでそうした特質をより深く探るためには、子ども期の村の様々な生活体験をさらに収集しながら、村民の一人ひとりの中に形成されてきたであろう価値や文化の特質に少しでも迫ることが肝要であろう。そのため質的調査として、19名の村民から直接聞き取り調査を行った。時期は2000（平成12）年6月～7月及び2001（平成13）年7月～9月の2回に分けて行った。対象は川島村出身者もしくは子ども期を経験した者である。

聞き取り調査の結果から、子どもの生活世界に強い影響を与えてきたと思われる文化的な要因を析出したい。なお、聞き取り調査の資料については、( )に証言者の出身部落名、年齢、性別、採集年月日を記してある。

##### (1) 親一子、大人一子どもの分断的縦関係

子どもの成長・発達の文化的な母体は家族である。家族関係の型は、すぐれて子どもの成長のスタイルを規定する。わが国の家父長制度に基盤をおく伝統的な家族制度は、情緒的な情愛を基底に宿しながらも父権の優位さを背景に、権威的な親子関係を特徴づけてきた。川島村にみられる親子関係も、基本的にはこうした伝統的な権威に依拠する親子関係と規定される。ただ、その特質において輪中の紐帯に規定された大人社会の圧倒的な優位さを前に、大人（＝親）対子ども（＝子）の関係がほとんど疎遠・分断的な関係のようであり、そうした中では子どもや家庭の位置は過小評価されざるをえないのである。次の証言はその点をものごとっている。

「一般に親子関係は薄情のように思われた。息子に対して、どちらかといえば冷淡な接し方に終始した。祖父は、孫に対して一度も抱いたりさわろうとしなかった。言葉遣いでも決して子どもの名前を直接よぶことはなく、『ヤイ』『オメエ』とぶっさらばうに呼び捨てた。」（松原，65歳，女性，7/21，01）

「『部落根性』というような気質があり、親も子も荒っぽい。『ドタワ』、『タワケ』などとなるが、人情は厚い」（渡，75歳，男性，7/21，01）

「『男尊女卑』の傾向が極めて強い。昭和30年頃まで、女性は一日中家の中で撚糸作業を続けているのに、

男衆は朝、燃糸の仕事を取ってくると喫茶店などにたむろし、夜ともなれば柳ヶ瀬(注、岐阜市内の歓楽街)に繰り出して遊んでいた。家庭のことはあまりかえりみないことをよしとする風潮があった。」(笠田, 84歳, 男性, 7/11, 00)

その一方、子どもは家庭内労働力のみならず、小学生段階で早くも親の仕事(=大人の世界)に加わり、いうならば職業的な社会化が開始されていた。

「とにかく家の手伝い、仕事をやった。働くのが当然の気風だった。川で砂利採取が盛んで、小学校6年生ぐらいでも『砂利こぎ』(注、砂利の採取)に乗船した。」(笠田, 69歳, 男性, 7/11, 00)

「部落の周りは養蚕の桑畑ばかりだった。桑の葉を刈ったり、蚕に食わしたりという仕事をやった。また、父親が部落で盛んな筏乗りで、その組長だった。12歳の頃には筏に乗って手伝っていた。1人では寂しいのもう1人ぐらい子どもを乗せ、6~7人で1チームを組んで、桑名まで2~3日かけて材木を運んだ。」

(渡, 81歳, 男性, 7/20, 01)

## (2) 年中行事と子どもの組織的社会化

年中行事は輪中村落の部落意識を強化し、村民のハレの場を提供してきた。川島村においても、各部落の行事・慣行は1年を通して多彩であった。そうした中で、子どもにとっての年中行事は、部落あげてのお祭りなどを通して大人社会との一体化、共属感情を分有することが可能となる機会を意味した。また一方において、子ども独自の年中行事により大人とは異なる子どもの世界の認知、子ども独自の集団形成の場ともなった<sup>22</sup>。

輪中村落に不可欠の水神様をまつる行事は、質問紙調査の村行事の体験率からもすでに明らかにされたように各部落・集落で行われてきた。ここでは、渡、北山地区で行われてきた「川祭り」に注目し、それが果たしてきた子どもの社会化機能を分析したい。

川祭りは「やま」が、東西2艘出され、囃子を打ち、昼から夜にかけて盛大に行われた。例年、行事は「新楽・やまを飾る」(7/29)→「本祭り」(7/30)→「やまおろしと送り込み(後祭り)」(7/31)という流れで、3日間かけて行われる部落最大の行事でもある。『渡島祭礼規則』(明治35年)によれば、この祭りを執り行うのは28歳までの若者と規定され、17歳未満のうちに若者組にはいることも義務づけられていた。しかも、祭礼の仕事の責任分担が「祭礼係階級」として年齢階梯に基づいて明確に決められている<sup>23</sup>。

東西2艘の「やま」は部落内の2組の同姓集団(クミ;組)によりそれぞれ作られ、祭りは担われてきた。そしてそれぞれの組が、次のような独自の祭礼係階級を規定している。

東組(=川瀬組) 小若連(14-16)→中組(17-19)→帳方(20-22)→出頭(シュットウ)(23-25)

西組(=野田・脇田組) 5等組(16-17)→4等組(18-19)→3等組(20-22)→2等組(22-23)→1等組(24-25)

( )の数字は年齢区分。

川祭りには笛、太鼓による囃子が行われるが、その練習は当元(トウモト)とよばれる、その年の祭りの世話係を部落でまかされた家で半月前から毎日行われる。練習場には女性は入室を禁じられ、また練習の開始日と終了日には、当元は祝い酒でもてなすのが慣わしであった。練習の段階は、練習始め(7/15)→二本調べ(7/18)→一本調べ(7/20)へと、レベルを上げていく。二本調べは、皆の前で2人ずつ、笛、太鼓の審査を受ける。一本調べは、二本調べで合格したものが、さらに皆の前で1人ずつ審査を受ける。こうして、一本調べに合格すると紋付き羽織はかまを着て、祭りに参加を許される。一方、合格できなかったものは、やまへは上げられず、諸道具の持ち運び役か太鼓もちなどの使いにまわされたのである<sup>24</sup>。

川祭りの行事のあらましはこのようなものであったが、これらすべては若者組のみで取仕切られていたところに注目しておきたい。部落の大人や長老はどんな立場にしようと、口出しすることはできず、出頭や1等組に一切の統制と采配がゆだねられていた。

「男の子は15歳になれば必ず仲間入りさせられるので、それまでに親から必死になって教わった。一本調べに合格すると紋付き、はかま姿になれたので、合格していない『ゆかた姿』の者とはっきり区別され、子ど

もながらに晴れがましさが感じられた。また、練習期間に仮病などをつかって練習を休むと、親が呼び出されて『帳方』や『出頭』の若者から、親自身がこっぴどくしかられる破目になった。」(渡, 75歳, 男性, 7/21, 01)

このような部落内の祭礼系の担い手のプロセスを経ることによって、はじめて村落共同体における「一人前」として大人社会に仲間入りをすることが可能になったのである。つまり大人と子どもの世界は明確に一線を画されており、大人の世界をはるか彼方にのぞみながら、子どもたちは徐々に部落のしきたりや価値観、文化様式などを受容していったのである。そうした意味において、部落内の年中行事は子ども期の組織的な社会化として機能し、川島村の輪中環境に基礎を置く「水」への畏敬や強い連帯感情が醸成されていたとみることができよう<sup>25</sup>。

### (3) 仲間集団と「けんか」文化

子どもの日常生活で遊びが占める位置はきわめて大きい。しかも既述したように、水場における遊びだけでも種類は多様であり、人工的な遊びよりも自然界を相手にする外遊びこそが主体であった。遊びにおける仲間集団の特徴として、川島村の子どもの世界に「けんか」文化ともよべるような攻撃的な対抗意識が働いていることである。相手は他村の子どもであったり、他部落の子であったりしたが、とにかく果敢に攻撃し決して相手に弱みをさらけださない激しくいさましい気性が特徴的であるようだ。

「川島の本校と分校の間では、渡部落の子が一番けんか早く、また強かった。1対1でけんかをした。」(渡, 75歳, 男性, 7/21, 01)

「『部落根性』という表現で当時は他部落の子と対抗意識を持っていた。笠田の子は三斗山島部落の子と、川原で石ぶちでよくけんかをした。」(笠田, 87歳, 男性, 7/20, 01)

「一宮側(愛知県, 川をはさんで隣接している)の子とよくけんかをした。たった1人, 2人でも、川をはさんで石を投げあい立ち向かった。」(渡, 69歳, 男性, 7/21, 01)

なお、同様の証言を、小網・84歳, 渡・71歳, 渡・81歳などの男性からも得た。

こうした攻撃的かつ対抗的な子どもの集団性は、日常的には権威的な親子関係によって、また村落共同体文化としての輪中根性が子どもの仲間関係や行動形態にも影響し、攻撃的傾向性を形成し、規定していたとみられる。

これまでみてきたところから、子どもを取り巻く生活世界や遊び文化の中に、水との厳しい闘いを余儀なくされてきた川島村の輪中特性が映し出されているように思われた。しかしながら、自然に対峙的である一方、子どもの遊びの世界では自然を自らにうまく取り込み、自然との共生感覚をはぐくむ要素を認めることができる。次に、遊びという活動形態を通して「水」という自然環境とどのように関わりえたのか、そうした遊びの持つ環境行動的な特質<sup>26</sup>を検討しておきたい。

## 5. 「水」環境に規定された遊びの特質

川島村の子どもにとって、遊びのもつ意味はただ単に生活から遊離した、遊行消費の時間ではなかった。むしろ生活の中に遊び的な要素が取り入れられたり、家の手伝いや労働のつかの間の二義的な位置に遊びは置かれていたといつてよい。それゆえに、まず第1の特質は遊びが生活と強く結びついていたということである。しかもそうした生活の場は、「水」環境であり、水との結びつきの中で遊びないし遊び的な要素が生み出されてきたということである。例えば、すでに触

れられた「こわし拾い」については、家族総がかりの仕事である反面、子ども同士でこわしの多寡を競い合う遊び的要素も認められた。このように「水」環境が与える制約性を逆に主体的な子どもの遊びに転化する事例を2つ、示しておきたい。

### ①魚の「替え捕り」

大雨や洪水の後、水が引くと低地のあちこちに水溜りや池ができた。アユ、ウグイ、シラハエ、ニゴイ、フナ、ナマズ、などが逃げ残っていた。池を二つに仕切って、片方の池の水を干からせてまず魚を捕り、その次にもう一方の池をさらに狭めて捕獲する。この作業はある程度の人数が必要であり、子どもたちは5～6人の仲間を組んで行った。(渡・71歳、笠田・85歳、共に男性、01)

### ②渡船の手伝いと遊び

渡し船が唯一の交通手段なので、村の大人は当番制で渡船の船頭をした。船は15～16人乗りで、竿または櫓こぎであった。父親が当番の時は、手伝いながら操船したりして遊んだ。手伝いといっても、ほとんど遊びに近いものだが、お駄賃がもらえた。(男性、87歳、笠田、7/20、01)

第2の特質として、水場の遊びの中に自然の法則や自然との関わり方の掟、さらには仲間集団形成の基礎が見出せる点である。遊びの形態は、そのほとんどが集団的なものであり、単独の一人遊びは少ない。そしてまさに原生的自然を相手とする遊びは、子どもだからといって容赦することはない。つまり自然の法則性や特質を必然的に体得せざるをえない状況に置かれるのである。

『芝めくり』とよんだが、子どもたちだけで川原の土手に火をつけて、野焼きをする。風の向き、強さ、火の広がり方や勢いなどを子どもながらに計算して、手分けをしながら遊んだ。スリルがあり、冒険遊びのようだった。(渡、81歳、男性、7/20、01)

「川島の子だったら、川のことはよく知れ、と親からしこまれた。川の中の歩き方、流れが速いところは浅く、静かなところは深みであるとか、川の渦に巻き込まれたら、川底を足で強くければ脱出できるというように。川で死ぬことは絶対なかった。」(河田、67歳、女性、8/23、01)

「捕った魚は家に持ち帰るか、その場で皆で食べる。食べる時は、年下の子も分け方に特に文句は出ないようになって食べた。ひとりじめをしようとか、ぜんぜん考えることはなかった。」(小網、84歳、男性、9/13、01)

さらに第3に、川島村では子どもの成長の早い段階で、「水」という自然との直接体験が開始され、しかも「泳げること」は単に子ども自身の目標であるにとどまらず、村落共同体に共有された成功的な価値を有している、という点である。

「川遊びは5歳ぐらいからやり、ほとんどの子が泳げる。男の子も女の子も関係なく。」(男性、81歳、渡、7/20、01)

「渡部落の子どもにとって、川で泳ぐ能力、舟をあやつる技術は、村の皆が求めている能力だった。だから、そうしたことは早くできるようにした。子ども同士遊びながら、お互い始終試し合う競争があった。例えば、川に舟を出してわざと転覆させて、相手を泳がせる。泳げなければそのまま溺れてしまう。どんな子も必死になって岸まで泳いだきたものである。」(渡、69歳、男性、7/21、01)

「漁師の舟を何艘も横に並べて、どのくらいの数の底をもぐってぐり抜けられたかを競い、お互い自慢しあった。」(渡、75歳、男性、7/21、01)

輪中地域の自然的な特質が、子どもの成長のスタイルをこのように方向づけていたというべきであろうか。村内でも、とりわけ渡部落は親も筏に乗っていたり、川業に従事する家が多かった。その意味で、渡部落は社会文化的にも最も川や水場という自然に密接に結びついた典型といえない<sup>27</sup>。

## お わ り に

川島村の村民調査から、子どもは自然の脅威も、また豊かな自然の恵みも、小さい頃からの「遊び」空間の中で体得してきたことが明らかにされた。また、遊びの中に自然や仲間との規範性や集団性が形成されていたことも、確かな点である。「遊び」空間には、親や大人社会から解放された、子どもだけの生活世界と秩序意識が生まれる。「輪中」村落には、そうした意味において、生活と遊びを結合する「親水性」が育っていたといえよう。

しかしながら、こうした輪中村落および輪中的な生活様式は、その後の都市化、地域開発が進む中で変容せざるをえなかった。もちろん、子どもの生活世界も例外としない。近代的な生活文化、生活スタイルの流入、浸透とともに、子どもの遊びや仲間集団、そして生活構造が変容を余儀なくされ、自然と対峙しつつ、親水性を育ててきた子どもの生活世界の特質も失われてきたようである。そうした変容の過程を探りながら、自然環境に規定され、なお自然との共生的な輪中村落が有した特質が、今後どのように子どもの生活に生かされていくのかを検討することは、今後の課題である。

## 注

- 1 低湿地における囲堤形態を持つ集落は、利根川、信濃川、淀川、吉野川など日本の大河川の下流域にも広く見られてきた。しかし、輪中についてはその呼称も含めて、一般に次のように定義される。「ある範囲の土地を堤防で囲い込む水防方式の一形態。濃尾平野では一つないし複数の集落と耕地を合わせて堤防で囲んだものを輪中と呼ぶ。この呼称は囲堤そのもののほかに、その中で生活する人びとの水防共同体という意味も含んでいる。」(佐々木史郎)、『人文地理学辞典』山本正三、奥野隆史他編、朝倉書店、1997、472頁。
- 2 安藤萬壽男編著『輪中―その展開と構造―』古今書院、1975。
- 3 別枝篤彦「西濃平野に於ける輪中の地理学的研究」『地理論叢』第1輯、1932。
- 4 中沢弁次郎監修、秋山恒士ほか共著『輪中聚落地誌』日本農村問題研究所、1936。
- 5 松尾國松『濃尾に於ける輪中の史的研究』大衆書房、1939。
- 6 安藤萬壽男編著、前掲書。
- 7 安藤萬壽男『輪中―その形成と推移―』大明堂、1987。
- 8 伊藤安男、青木伸好『輪中』学生社、1979。
- 9 岐阜県教育委員会編『岐阜県輪中地区民俗資料報告書第1』(1968)、『同 第2』(1969)、『同 第3』(1970)、岐阜県教育委員会。
- 10 しかしながら近年の民俗学研究において、「環境の民俗」という新たな視点が提起された。野本寛一によれば、「民俗の生成基盤たる環境に注目することによってわが国の民俗を見つめ直すこと、人と環境の有機性、環境をめぐる人と人との連関などに注目し、これまで見えなかった民俗を探ること、日本人が、自然環境とどのように関わって生きてきたのかを探り、今後の指針を得ること、などである。」として、「環境」の意味するところは、「環境問題」と直結するものではなく、「生活・生業と密着した自然環境である。」という。野本寛一「総説 環境の民俗(1)「環境の民俗」設定について」『講座 日本の民俗学4 環境の民俗』赤田光男、香月洋一郎、小松和彦他編、雄山閣、1996、3頁。
- 11 「子ども」「子ども期」なる観念は、西欧における近代家族の成立とともに誕生したとされる(フィリップ・アリエス『子供の誕生』)。日本においては、おそらく家族労働を主体とする「家」意識が確立する中で生まれてきたと考えられる。「近世の中期に、『家』意識が確立するのに伴ってあらわれた『小さき者』へのまなざしは、明治の近代国家の成立とともに、公教育制度の採用によって徹底したものになっていく。」飯島吉晴『子供の民俗学』新曜社、1991、24頁。「子ども」を歴史的にとらえる接近方法として、深谷昌志は①おとな史から子ども



も史へ、②制度史から事実史へ、③学校史から生活史へ、④教育史から学習史へ、という4つの視点をあげている。深谷昌志『子どもの生活史』黎明書房1996、16～18頁。

- 12 輪中堤（水除堤）をめぐることは、利害の相反する高位部（上郷、上筋）と低位部（下郷、下筋）で洪水時などには、流血の惨事となることもあった。このような輪中水論の対立抗争を調停する方策として、江戸時代以来「定杭約定」「納得金約定」「江代米約定」などの慣行が形成されてきた。伊藤安男、青木伸好、前掲書、166～167頁。
- 13 木曾川下流部の改修工事は明治期に完成したが、上流部はいぜんとして川幅が狭く、屈曲し、河床に土砂が堆積して、洪水の脅威から出水ごとに地元民の必死の水防活動が求められた。そのため大正10年以降10ヵ年計画で河川改修工事が行われた。改修の重点として川島地域の乱流整理があった。新河道形成掘削により流路の整備が行われ、現在の本川（本流）がつくられたのである。（『川島町史 通史編』153～160頁参照）。しかし、そのために本川の位置にあった「三斗山島」の30戸の集落が川床に没し、移転を余儀なくされた。現在その跡地に、碑文がのこされている。なお、昭和13年7月に木曾川大洪水が発生し、改修工事が戦時中を通して行われ、戦後も昭和28年から護岸制水工事が着工されてきた。こうした工事により、洪水への不安が一掃されるにいたった。
- 14 『川島町史 通史編』川島町編集発行、1982、795頁。
- 15 本家、分家を表す言葉は組により違いが見られるようだが、一般的には本家をホンヤ、オオヤ、分家はアラヤ、シンヤ、ワカレヤなどが使われている。松倉地区の本家一分家関係を調べた調査研究では、同属集団としての組は、ヤシキ、イトコアイ、ナガレ、スジなどとよばれる下位集団に分化され、さらにこれらを中心にごく近い近親関係をもつ「ミウチ」とよばれる小単位に分けられている。白鳥真紀「輪中型村落の社会構造—岐阜県川島町松倉地区の場合—」（名大卒業論文）、1982、28頁。
- 16 川島地区における最初の学校は、明治6年創立の博文義校（松原島村）であった。明治19年小学校令により、各区に1校が設立され川島地区は5ヶ所に分立することになった。この時期から学校教育の分立が始まったといえよう。輪中地域という特殊性から通学の困難さや生活的不安定ゆえに、中途退学者が目立ち、教育の整備が遅れていた状況が、次の記述からもわかる。「川島村は面積も広く人口も多数であるが、完全なる高等小学校の設けなく、単に松倉尋常小学校に修業年限二か年の高等科併置されたのみで、設備もまた不完全なので入学生も少なく多くの児童は愛知県羽栗郡東部・中部ないし西部の各高等小学校に通学したがこれまた遠距離の上に渡船するの不便があって通学の困難はなほだしかつたのでまた通学する者は皆村内上流の子弟のみで他は多く中途退学するありさまであった。」『川島町史 通史編』川島町編集発行、1982、908頁。  
通学渡船の当時の様子は、田中正夫氏（川島町文化財保護審議会委員長）の次のような報告資料の中にうかがうことができる。「雨が降って木曾川が増水すれば、渡しは中止され、笠田島民は不便で不自由な生活をした。笠田からこの渡し船で本校に通っていた学童たち（5年生以上、私も含む）は、笠田から木曾川増水の知らせが入ると、直ちに学習途中でも帰り仕度をして、川岸の渡船場へと急ぎ迎えの船を待った。」田中正夫〔笠田の渡し〕「平成11年度『美濃文化自然誌調査会』成果」、岐阜総合研究所への提出資料、2000年1月。
- 17 2001（平成13）年度第2回高齢者大学（川島町公民館主催、公民館集会室会場）の参加者97名に調査票を配布し、60名の回答を得た。回収率は60.8%。
- 18 調査票の中で、「どんな家の手伝いや親の仕事の手伝いをしたか」という質問の回答を整理すると、次のようである。畑仕事（たがやし、除草、芋ほり、麦刈りなど）、養蚕（桑取り、世話やき、餌やりなど）、子守り、野菜売り、家事手伝い、風呂わかし、井戸水運びなど。竹内利美が1941（昭和16）年に行った信州の子どもの生活調査には、こうした子どもの姿が浮きでている。「家の中の子守り、掃除、水汲み、炊事、火燃し、洗い物を始め、草むしり、畑作、虫取りなどの農業、それに桑むきや繭かき、網干しなどの養蚕が加わるから、子どもたちは常に多忙になる。」竹内利美『信州東筑摩郡本郷村における子供の集団生活』アチック・ミュージアム、1941、240頁。
- 19 村落の隣保扶助の一つである「手間代わり」は、農仕事の取り入れなど忙しいときに近所隣り、親睦で手伝い合いをし、ぼたもち（おはぎ）や、よもぎ餅をお互いに配り合ったという。『川島町史 通史編』川島町編集発行、1982、1242頁。
- 20 うどんの日は旧6月16日で、祇園会ともいう。農休日とも称し学校なども休みになった。この日はうどんを食

べる慣わしで、農家では自慢の手打ちうどんを作って食べる習慣があった。『川島町史 通史編』川島町編集発行、1982、1275頁。

- 21 山の神のお祭りで、一般には春先と冬に各所で行われてきたが、川島では多くは冬に行っていた。子どもたちは俗に「山の子様」とよんだ。小網島部落の場合、「お寺の境内で子どもだけで夜明かしをして、五日ごはんを炊いて食べた。部落内の役にあたっている家を一晚中かけてまわり、唄を歌って物品や小銭を寄付してもらい、集めた。」という。小網町、刈谷喜市氏談。
- 22 村落社会における「子供組」「若者組」などの年齢集団が、ムラの組織として位置付けられ、存続してきたことは、民俗学研究の多くの事例報告とともに明らかにされている。栃木県河内郡の小正月行事を報告した、高橋文太郎「下野古里村における子供組行事」『民族学研究』第二卷第三号、日本民族学会編、1936、727～733頁。若者組の成人儀礼として、京都・静原町の「エボシギ（烏帽子儀）」や、大原の宮座（若者組）の「道念」などの行事は現在も伝承されている。橋本章「大人の仲間入り—京都のエボシギとサンヤレ」『日本の通過儀礼』八木透編、思文閣出版、2001、55～59頁。
- 23 「渡り島祭礼西組規則」『川島町史 資料編』川島町編集発行、1982、997～998頁。
- 24 『ふる里の川祭り』羽島郡川島町川祭り保存会、1992、9頁。
- 25 青年集団史を研究した平山和彦は、「若者組一般の機能を体系的に把握するのは必ずしも容易ではない。」とことわりながら、次のような担当機能の分類を行っている。①信仰行事、②民俗芸能、③村仕事、④婚姻関係、⑤制裁、⑥その他。この分類に従えば川島の「川祭り」は、今日的には②の要素もみられるが、元来は①である。また、年齢集団の組織と機能を日本の村落構造と関連付けて把握する「年齢階梯制」は、「子供組」「若者組」を通過してムラで「一人前」になる成長の連続過程を整序する概念といえる。岩田重則「年齢秩序と年齢集団」『講座 日本の民俗学3 社会の民俗学』赤田光男、香月洋一郎、小松和彦他編、雄山閣、1997、139～150頁。住田正樹『子どもの仲間集団と地域社会』九州大学出版会、1985、13頁、などを参照のこと。
- 26 飯島吉晴は伝承的な遊びの持つ自然との接触や身体的な行動性に注目して、次のように述べている。「遊びは子供たちにとって、その体力と知力とを総動員し、自分たちの全生活や全存在をかけるほど夢中になれる尊いもの」「だれにも強制されずに自らの自由意志で加わり、創意と工夫とで未知なるものを発見したり新しいものに挑戦する場」である。飯島吉晴、前掲書、163～164頁。
- 27 渡部落の生業や社会生活、伝統文化については、「昭和初期・川島町渡町の筏と生活」（冊子）、川島町ふるさと史料館、2000、非売品、を参照のこと。